

協働

☆地域未来塾研修

町田市では、子どもたちの基礎学力の向上を図るため、学校の授業以外で学習習慣の定着を目指し、中学校の放課後を活用した地域未来塾を実施しています。8月22日（金）に、初めて地域未来塾の講師の方を対象に研修を実施しました。

初めに町田市教育委員会、小松指導主事より、事前アンケートを参考に以下のような説明がありました。①町田市の中学生の学習・生活状況につ



いて（2024年度全国学力・学習状況調査の結果から）②地域未来塾の現状について（事前アンケート結果から）③東京都及び町田市が目指している「地域未来塾」について（学び続ける力、学びに向かう力）について。その後に行った各学校の情報交換、情報交換では、現状と成果・課題を6グループに分かれて話し合い、グループを2回に分け、違った所属の方と話し合う機会を確保しました。それぞれのグループでは、和やかな雰囲気の中にも生徒への思いに溢れる話し合いが展開されていました。共有させていただきましたご意見を一部ご紹介します。

- ・講師が20名いる学校では、マンツーマン指導で展開している。
- ・教科として、数学・英語をメインに行っている。ここ2～3年に、外国籍の生徒が増え、別室指導（日本語や数学などの教科指導）での見守りが必要となっている。
- ・担任制で実施している学校では、週に1回教科（英語・数学）を分けて行っている。
- ・居場所づくりとして行っている学校ではおしゃべりもOK。ただし、来たら勉強しようと促している。
- ・テスト前に参加者は多くなるが、終わると少なくなる。
- ・生徒は課題として Chromebook を持ってきて勉強が自己完結していることがあり、関わるのが難しい。
- ・地域未来塾に対して負のイメージ（学習が遅れている生徒が行くところ）が定着している様子が見られている。対策として、新入生に地域未来塾について内容を説明してもらうとよい。
- ・生徒が使用している教科書・テキストを講師に配布してくれる学校と、そうでない学校がある。
- ・定期考査の1週間前から行い、多いときは30名の参加がある。
- ・毎月 tetoru で未来塾の実施予定を通知している。
- ・1人の講師が2・3人の生徒を見る場合、勉強が遅れている子が周囲の子の目を気にしてしまうことがある。
- ・1回、2・3時間の実施だと生徒の集中力としてギリギリの状況がみられる。

○実践取り組み例として、小山田中学校の「小山田地域応援団」通称「OVR（Oyamada Village Rooters）」の、放課後「ゆびとま教室」を紹介しました。

☆コミュニティ・スクール（CS）研修

8月26・27日にCS研修を実施しました。本年度からスタートしたCS研修は、各校から管理職1名、学校運営協議会の代表の方1名に参加いただき、学校と地域が連携する学びを推進する中で、コミュニティ・スクールのさらなる前進・発展を目指し、町田市立小中学校60校を2つのグループに分けて2日間で開催しました。研修の前半は、文部科学省「地域とともにある学校づくり～コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体化推進～」国立教育政策研究所総括研究官



志々田まなみ先生の研修動画を視聴しました。続いて、地域と共に学ぶ力を高めるために「自ら学び、あなたと学び、ともに創る町田の未来」という演題で「子どもを中心とした地域との関係づくり」をテーマに、本市学校支援センターの宮島徹ゼネラルボランティアコーディネーター（東京都CSアドバイザー）による資料解説がありました。

後半は、席替えを行い、様々な校種・学校が混ざる形でグループワークを行いました。テーマは、「子どもを中心とした地域関係づくり」ということで、1グループ5・6名で10のグループに分かれ、話し合いを行いました。最後は、グループごとに発表して、参加者全体で情報共有を行いました。各グループの発表内容の一部をご紹介します。

【学校の視点】

- ・地域の教育資源、何ができるか・何をしてもらえるかについて、協議を行う。
- ・（小学校）サマースクールの人材確保。
- ・中学生による地域防災の役割。
- ・中学校は、課題の共有が難しい。
- ・（小学校）学校の課題を学校運営協議会に出して共有を図っている。
- ・学校は、地域活動を積極的に取り組む（地域の清掃、地域の歴史を探究する等）。
- ・子どもたちによる感謝の会を実施する（コロナ前 → 会食会、コロナ後 → 徐々に戻していく）。
- ・子どもたちは、関わりがないと一般の方と区別がつけにくい。
- ・子どもたちに、関わりのある方（登下校安全パトロール、学習ボランティア等）の紹介を行う。
- ・地域人材の発掘で、読み聞かせ、部活動の対応、不登校等の子どもの対応等が増えてくる。

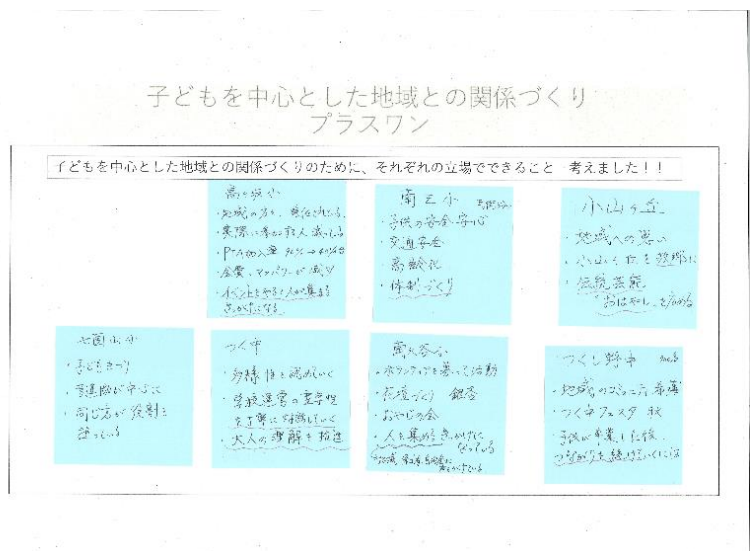
【学校運営協議会の視点】

- ・学校と連携して、子どもの成長にどの様に関わるか。
- ・コロナを過ぎてから、学校運営協議会だよりが発行される。
- ・学校運営協議会、学生、民生児童委員が中心に不登校の対応を行っている。
- ・学校運営協議会とVC、活動していることを地域と保護者に知らせるお便りの発行。
- ・子どもと学校運営協議会のつなげ方。

- ・学校運営協議会と子どもたちの話し合い、シンポジウムを昼休みに開催したい。
- ・学校運営協議会の見える化をどの様に図るか。
- ・学校、学校運営協議会の立場で子どもたちをどの様に育てるか。

【地域の視点】

- ・地域の取り組みとして、学校のみならず、学校・クラス以外で活躍する場所を設けている。
- ・地域の課題としては、子供会の衰退がある。お祭りに山車を出すときに、・中学生のボランティアを募る。
- ・集まらない背景を考えると、現役世代の保護者が地域とつながっていない。
- ・学校が30・40代の保護者をつなげる接着剤の役割を担う。
- ・子どもを引き出す活動を行い、その後ろに居る保護者も引き出す。
- ・子どもと地域の方（人）とのかかわり方について
- ・学校運営協議会、地域の声を上手く聞いて学校に戻す
- ・核家族の問題について。
- ・地域の方が暖かい。
- ・地域にコミュニティーがない。
- ・コロナ後、そもそもあったコミュニティーが減少。
- ・新しいコミュニティーづくり → 花壇・安全パトロール
- ・同じメンバーが違う場所でコミュニティーを作っている（メンバーが同じ）。
- ・2世代・3世代を取り込んで、小さなファミリー的つながりをどの様に作るかが課題になる。



○最後に、VCでもご活躍されている、関根教育委員に「講評」をお願いしました。関根教育委員には、お忙しい中、参画を賜りありがとうございました。

(文責；学校支援センター 宮島 天利 黒部)

